

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00601

研究課題名（和文）アスペクトを表す補助動詞に関する比較統語論研究

研究課題名（英文）A comparative study of the syntax of aspectual auxiliary verbs

研究代表者

松岡 幹就（Matsuoka, Mikinari）

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：80345701

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 600,000 円

研究成果の概要（和文）：日本語の「いる」、「ある」、英語の have、be など、世界各地の言語において、完了相や進行相の文に、本来所有や存在を表す動詞が助動詞として現れることが知られている。本研究は、この事実の背後にある文法的要因を明らかにすることを目的とした。そして、日本語の進行文に見られる助動詞「いる」について、存在動詞とそれから派生して助動詞になったものと2種類認められることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的にも地理的にも異なる世界各地の言語の完了相や進行相の文に、所有や存在を表す動詞が助動詞として現れるという事実は、人間言語一般の性質を反映したものだと考えられる。よって、その要因を明らかにすることは、人間の言語の文法や意味解釈の仕組みを知ることにつながる。延いてはそれは人間の思考の仕組みを解明することにつながると考えられる。

研究成果の概要（英文）：It is observed across languages that auxiliaries involved in perfective or progressive aspects have the same morphological forms as verbs of possession or existence, for example, 'have' and 'be' in English and 'iru' and 'aru' in Japanese. This project has aimed at providing a grammatical account of this fact. It has been argued that two kinds of 'iru' are involved in progressives in Japanese; one is a verb of existence, whereas the other is an auxiliary derived from the verb.

研究分野：言語学 統語論

キーワード：進行相 完了相 助動詞 存在動詞 所有動詞 統語構造 日本語

1. 研究開始当初の背景

完了や進行のAspect (相)を表す文に、本来所有や存在を表す動詞が補助動詞 (以下、助動詞)として現れることが知られている。例えば、現代英語では、完了相の文が主に have を、進行相の文が be を伴う。日本語においても、存在文や所有文に本動詞として現れる「ある」や「いる」が、接続助詞「て」を伴う動詞に後続して、(1)のように動詞が表す出来事の完了や進行を表す。

- (1) a. 太郎は 駐車場に 車を 停めてある。(完了 (結果))
b. 花子は その本を 2回 読んでいる。(完了 (経験))
c. 子どもが 公園で 遊んでいる。(進行)

歴史的にも地理的にも異なる様々な言語に同様な事例が見られる (Bybee et al. 1994) ことから、これらは人間言語一般の統語、意味、形態に関する特質を反映した現象として研究者の関心を集めて来た。特に、語の形態が統語構造に基づいて決定されるとする分散形態論 (Halle and Marantz 1993) の考えを取り入れた最近の統語論研究においては、Aspect 標識と所有・存在動詞の形態の同一性は、Aspect の構造と所有文・存在文の構造の間に密接な関係があることを示唆している。しかし、具体的にどのような統語構造が関わっているかについて、研究者の間で一致した見解は見られない。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの日本語の完了・進行相の研究において比較の対象として注目されることがなかった言語の事例を考慮に入れ、問題の日本語の助動詞と所有・存在動詞の統語構造上の関係についての独自の分析を提案することを試みた。これによって、普遍文法の観点からのAspect や助動詞選択の研究に貢献することを目指した。

3. 研究の方法

● 進行相

Laka (2006) によれば、バスク語の進行文に構造が異なる 2 種類がある。同言語の進行相標識 (*ari*) は本来、事物の場所を表す自動詞であり、標準的なバスク語では、進行文の主語がその自動詞の主語として現れ、従属節内の動作動詞の主語をコントロールする複節構造を持つ。一方、一部のバスク語方言の進行文では、進行相標識が機能範疇 (Asp)として現れ、動作動詞を主動詞とする単節構造を持つとされている。

本研究は、日本語の進行文でも、主語が動作動詞ではなく、進行相標識の「いる」の主語として現れていると見られる事例があることに着目し、バスク語の進行文に対応する 2 種類の構造があるという仮説を提案した。そのうち 1 つは、(2)に示すように、存在動詞としての「いる」が複節構造を形成する。

- (2) a. 太郎が 本を 読んでいる。
b. [太郎_iが [PP [NP PRO_i 本を 読んで] Ø_P] いる_v]

主節動詞としての「いる」が、主語名詞句を対象項として、また音形のない後置詞を主要部とする後置詞句を場所項として選択する。その音形のない後置詞は、接続助詞の「て」が付いて名詞化された節を補部として選択する。さらに、その「て」が付いた従属節の主語が主節動詞「いる」の主語によってコントロールされる。

もう一方のタイプの進行文は、(3)に示すように、「いる」が相を表す機能範疇 (Asp) として現れ、単一節構造を持つ。

- (3) a. 風が 木の葉を 揺らしている。
b. [[PP [NP 風が 木の葉を 揺らして] Ø_P] いる_{Asp}]

こちらの主語は「て」が付いて名詞化された節内に生成される。

存在動詞としての「いる」は対象項として有生名詞を選択するため、(3a)のように無生名詞を主語とする進行文は(2b)の構造を持たず、常に(3b)の構造を持つと考えられる。本研究は、この分析の妥当性について、内項指向の副詞の解釈、名詞句や空範疇の分布などに関する事実に基づいて検証することを試みた。

- 完了相

McFadden and Alexiadou (2010) によれば、中英語後期から初期近代英語の時代の完了相では、助動詞 be と have が一定の時制相の解釈に基づいて使い分けられていた。助動詞 be は専ら本動詞が表す事象の結果が存続することを表したのに対し、助動詞 have は結果以外に経験や過去の反実仮想など、幅広い完了の意味を表した。同様の助動詞選択が、現代のノルウェー語やアイスランド語の完了相にも見られると言われる。McFadden and Alexiadou は、これらの have 型と be 型の完了相の解釈の違いが統語構造に基づくものであると主張している。特に、have 型の構造には、be 型の構造には現れない機能範疇が存在することにより、be 型にはない解釈が可能になると言われている。

本研究は、上記の一部のゲルマン語に見られる have 型と be 型の完了相の意味の違いが、現代日本語の「いる」型と「ある」型の完了相の意味の違いにも通じることに着目した。その上で、McFadden and Alexiadou が提案する 2 種類の完了相の統語構造上の区別が、日本語の 2 種類の完了相にも当てはまるかどうか検証することを試みた。また、これらの完了相の「いる」と「ある」の構造と所有動詞の「いる」と「ある」の構造の間に関係があるかどうかについて考察した。

4 . 研究成果

- 進行相

上記の日本語の進行文の分析が、内項指向の副詞の解釈、名詞句や空範疇の分布などに関する事実によって支持されることを示した以下の論文を刊行した。

松岡幹就 (2019) 「「ている」進行文の統語構造と数量副詞の解釈について」竹沢幸一、本間伸輔、田川拓海、石田尊、松岡幹就、島田雅晴 (編) 『日本語統語論研究の広がり』25-44. 東京：くろしお出版

進行文において、主語が有生名詞か無生名詞かによって、文否定辞の「ない」が現れる位置の違いがあることが先行研究で指摘されている。上記の進行文の分析の帰結として、この事実が説明されることを示した以下の論文を刊行した。

Matsuoka, Mikinari (2021) Negation in *-te iru* progressives in Japanese. *Philologia* 52, 69-77. Tsu: Mie University.

- 完了相

McFadden and Alexiadou (2010) が提示している英語およびノルウェー語における have 型完了相と be 型完了相の代表例を概観し、それらの意味解釈と日本語の「いる」完了相および「ある」完了相の意味解釈を比較した以下の論文を刊行した。

Matsuoka, Mikinari (2022) On perfect auxiliary selection in Earlier English, Norwegian, and Japanese. *Tsukuba English Studies* 40, 289-298. Tsukuba: University of Tsukuba.

引用文献

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The evolution of grammar*. Chicago: University of Chicago Press.

Halle, Morris, and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. In *The view from Building 20*, eds. Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 53–109. Cambridge, MA: MIT Press.

Laka, Itziar (2006) Deriving split ergativity in the progressive. In *Ergativity*, eds. Alana Johns, Diane Massam, and Juvenal Ndayiragije, 173-195. Dordrecht: Springer.

McFadden, Thomas and Artemis Alexiadou (2010) Perfects, resultatives, and auxiliaries in Earlier English. *Linguistic Inquiry* 41: 389-425.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Mikinari Matsuoka	4. 巻 52
2. 論文標題 Negation in -te iru progressives in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Philologia	6. 最初と最後の頁 69, 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mikinari Matsuoka	4. 巻 40
2. 論文標題 On perfect auxiliary selection in Earlier English, Norwegian, and Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 289, 298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 竹沢幸一、本間伸輔、田川拓海、石田尊、松岡幹就、島田雅晴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 300
3. 書名 日本語統語論研究の広がり：記述と理論の往還	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------